



キンメダイ（太平洋）①

キンメダイは日本の太平洋岸では北海道釧路沖以南の陸棚縁辺や海山周辺に生息し、本資源は関東沿岸から南西諸島に分布する群である。現状の資源解析は関東沿岸から伊豆諸島周辺海域および四国沖南方の海山域を対象とする。

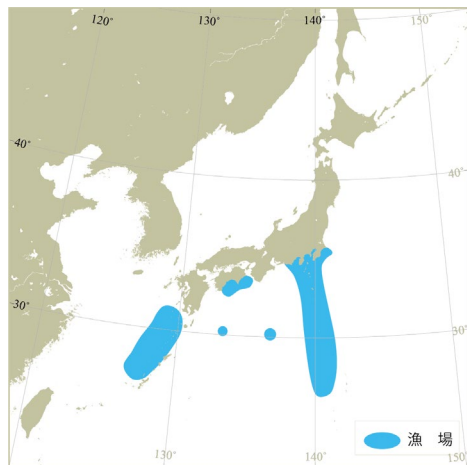


図1 分布域

陸棚斜面や海山、海丘の斜面や頂上に多く分布し、我が国太平洋岸における主な生息域（漁場）は房総半島から伊豆半島沿岸、御前崎沖、伊豆諸島周辺、四国沖南方の海山、高知沖、南西諸島周辺海域などである。

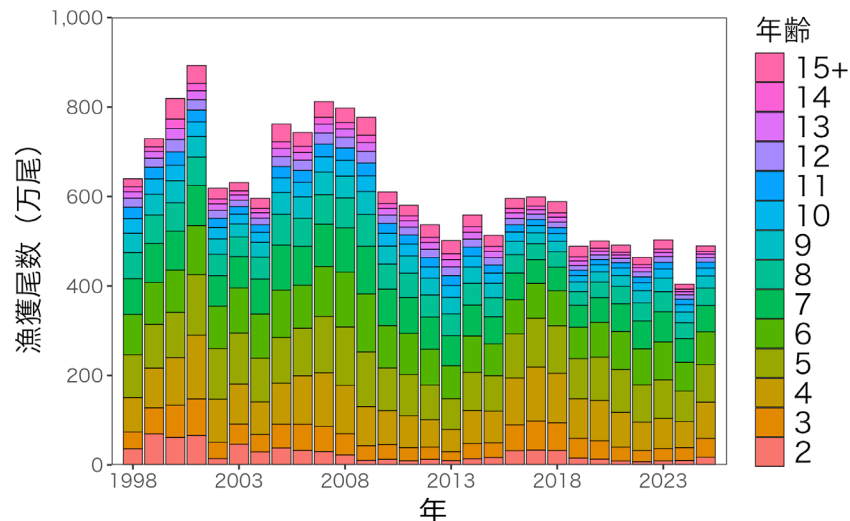


図2 漁獲量の推移

1980年代以降長期的に減少傾向で2025年は4.3千トン。資源評価の対象である関東沿岸から伊豆諸島周辺海域（千葉県、東京都、神奈川県、静岡県：一都三県）および四国沖南方の海山域の2025年の漁獲量は4.0千トン。

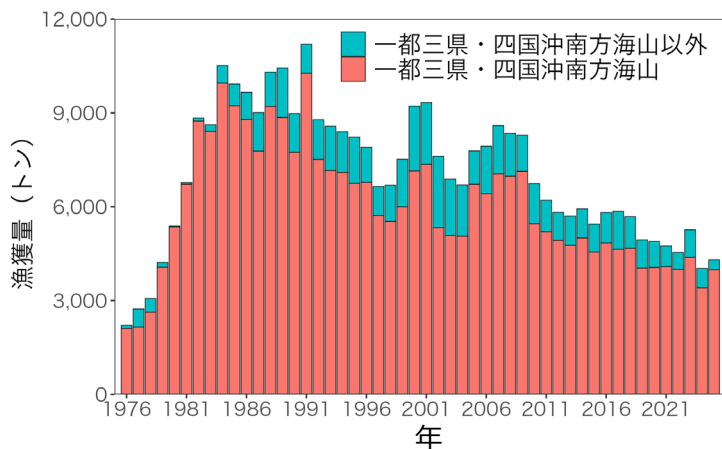


図3 年齢別漁獲尾数の推移

漁獲物の年齢構成を尾数でみると、4～10歳を中心に構成されている。経年的な差は小さい。

キンメダイ（太平洋）②

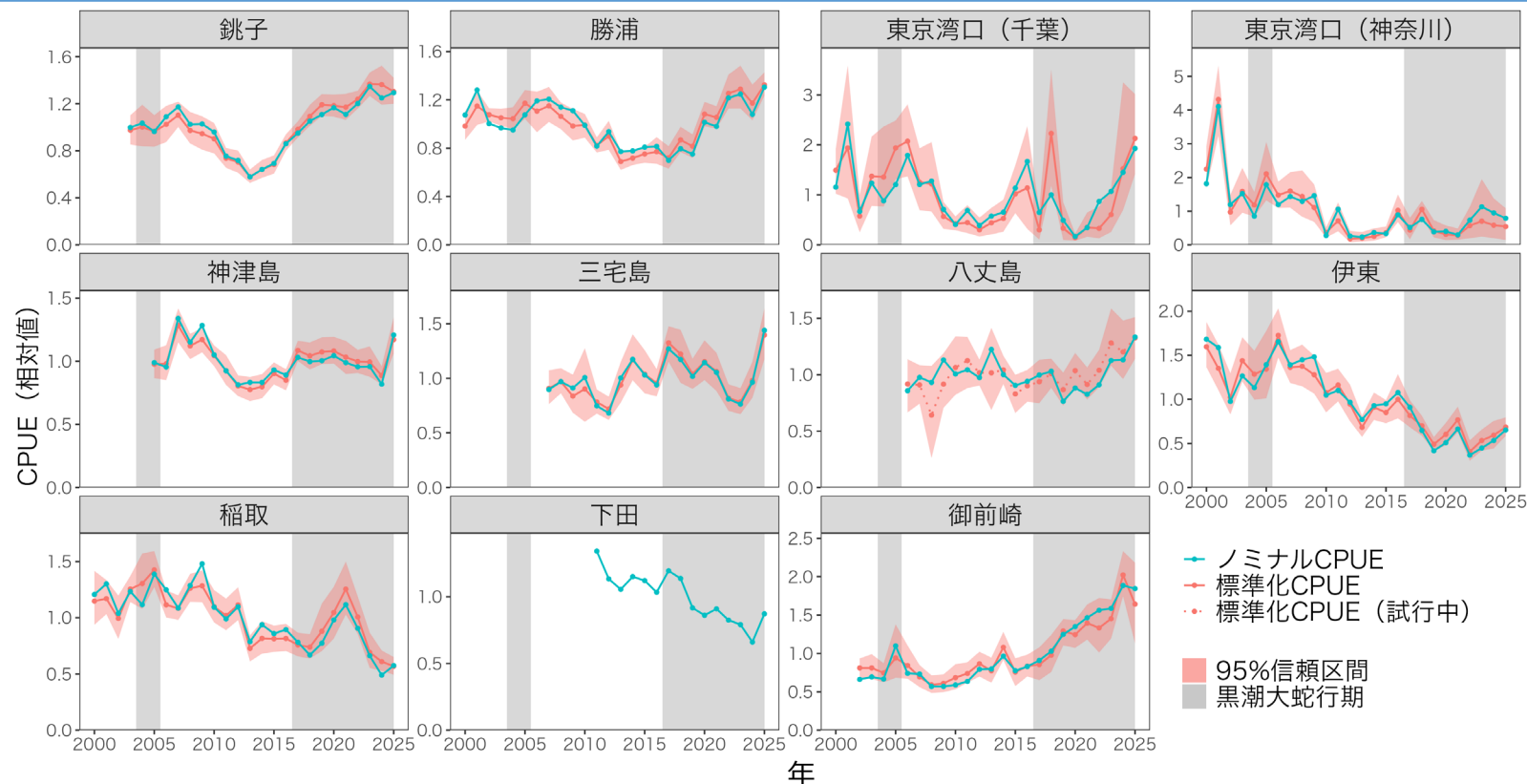


図4 海洋環境を考慮した各地区の1日1隻当たり漁獲量（CPUE）の分析

関東沿岸から伊豆諸島周辺海域の各地区の漁獲量を努力量で割ったCPUE（青線：ノミナルCPUE）と漁獲効率に影響を与える海洋環境などの要因を除去したCPUE（赤線：標準化CPUE、点線：試行中、赤色網掛け：95%信頼区間）。灰色で示す2004～2005年と2017～2025年は黒潮大蛇行期である。海洋環境の影響を考慮した標準化CPUEは、多くの地区において2018年以降、ノミナルCPUEより高い状態が続いてきた。一方、4月に黒潮大蛇行が終息した2025年は標準化CPUEとノミナルCPUEとの差が小さくなる、もしくは標準化CPUEがノミナルCPUEより低くなる地区もみられた。大蛇行終息による漁獲効率の変化が考えられるため、引き続きCPUEの動向を注視する必要がある。

キンメダイ（太平洋）③

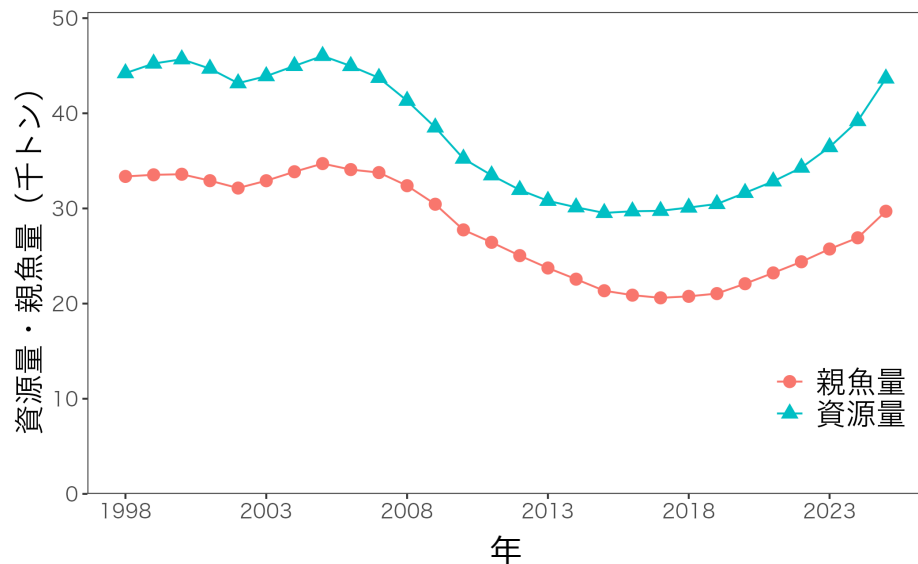


図5 資源量、親魚量の推移

資源量は、2000年代前半まで40千トン台で横ばいであったが、2015年に29.5千トンまで減少した。その後、増加傾向となり2025年は43.7千トンであった。

親魚量は、2000年代前半まで30千トン台で横ばいであったが、2017年に20.6千トンまで減少した。その後、増加傾向となり2025年は29.7千トンであった。

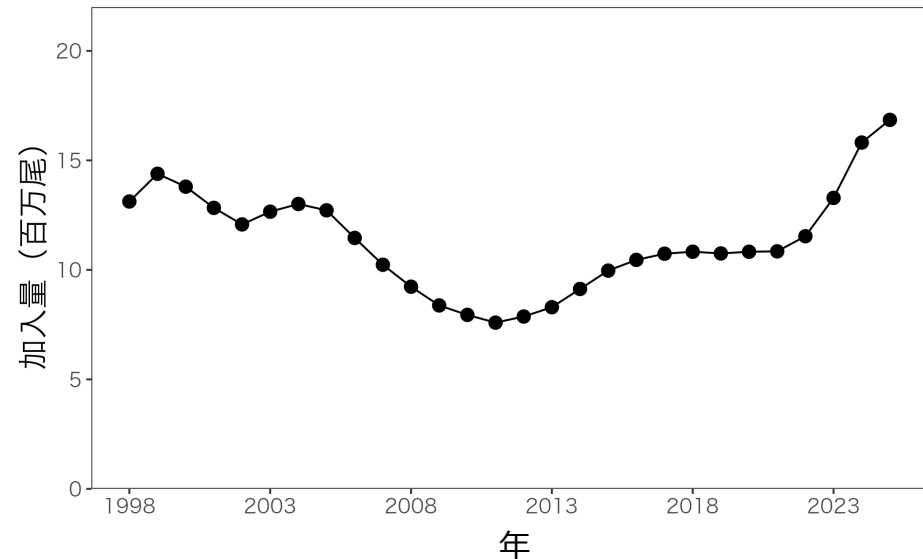


図6 加入量の推移

加入量（2歳魚の資源尾数）は2005年以降減少傾向であったが、2010年代前半から増加し始め、2016年に1,000万尾を上回った。その後横ばいで推移したが、2023年以降大きく増加し、2025年は1,685万尾となった。

一方、本資源では、漁業者による自主的な小型魚保護の取り組みなどにより若齢魚への漁獲圧が低くなっているため、加入量推定は不確実性が大きく、今後の若齢魚の動向に注意が必要である。

キンメダイ（太平洋）④

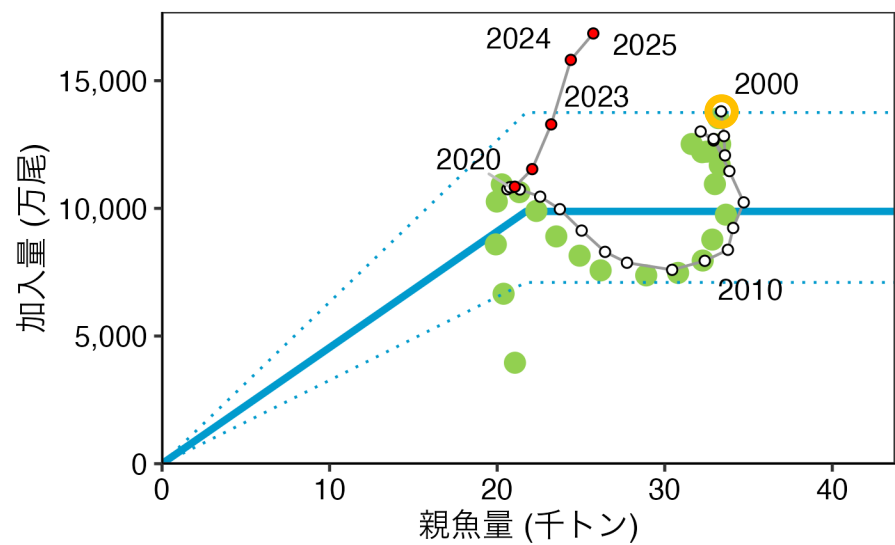


図7 再生産関係

1998～2018年の親魚量と2000～2020年の加入量に対し、ホッケー・スティック型再生産関係（青太線）を適用した。図中の青点線は、再生産関係の下で、加入量の90%が含まれると期待される範囲である。

緑丸は再生産関係を推定した時の観測値、白丸は2026年度資源評価で更新された観測値（そのうち黄丸は1998年の親魚量、2000年の加入量の観測値）で、赤丸は直近5年間の値である。図中の数字は加入年を示す。

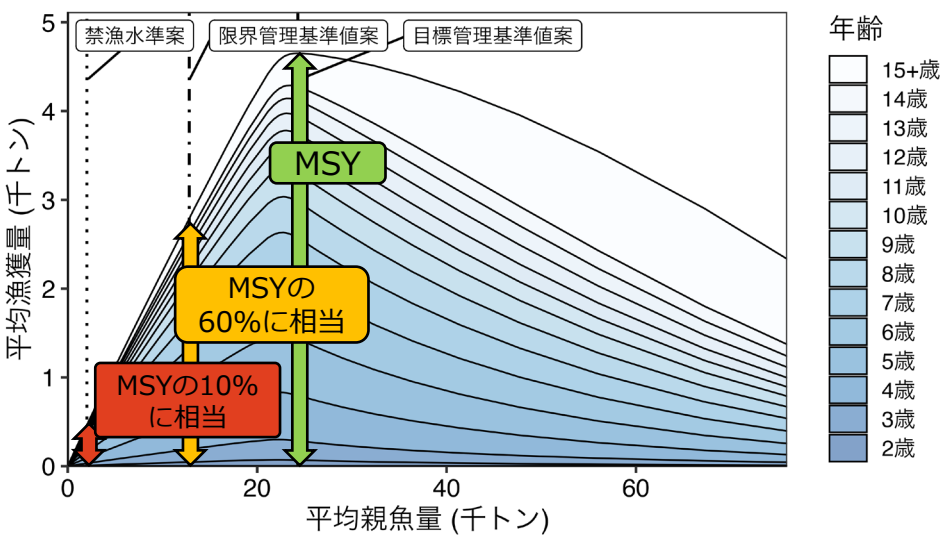


図8 管理基準値案

最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）は24.3千トンと算定される。目標管理基準値としてはSBmsy、限界管理基準値としてはMSYの60%の漁獲量が得られる親魚量、禁漁水準としてはMSYの10%の漁獲量が得られる親魚量を提案する。

目標管理基準値案	限界管理基準値案	禁漁水準案	2025年の親魚量	MSY	2025年の漁獲量
24.3千トン	12.8千トン	2.0千トン	29.7千トン	4.7千トン	4.0千トン

キンメダイ（太平洋）⑤

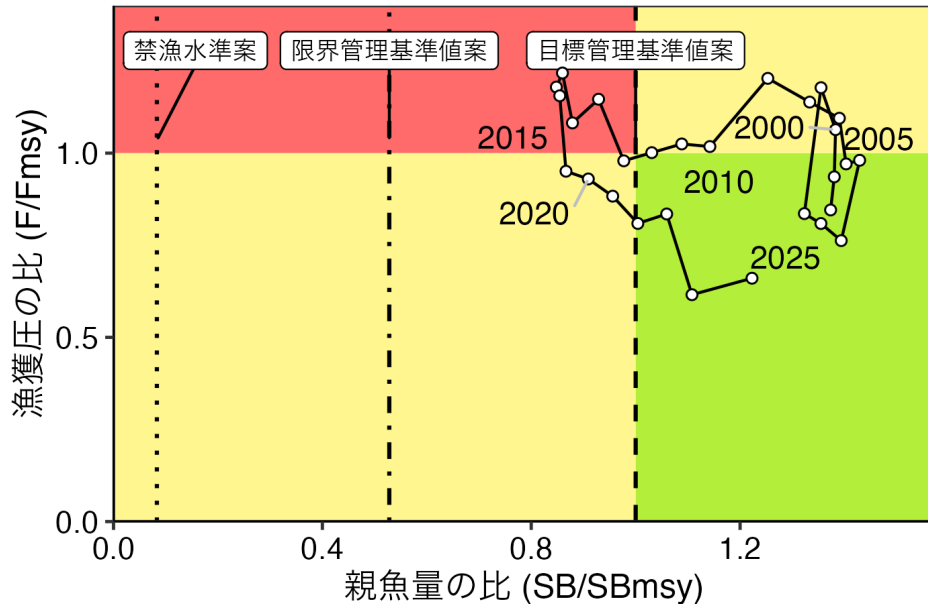


図9 神戸プロット（神戸チャート）

親魚量（SB）は、2018年以降増加傾向で、2022年以降は最大持続生産量（MSY）を実現する親魚量（SBmsy）を上回り、2025年の親魚量は、SBmsyの1.22倍であった。漁獲圧（F）は、2000～2001年、2007～2012年、2014～2018年は、SBmsyを維持する漁獲圧（Fmsy）を上回ったが、2019年以降はFmsyを下回っており、2025年の漁獲圧は、Fmsyの0.66倍であった。

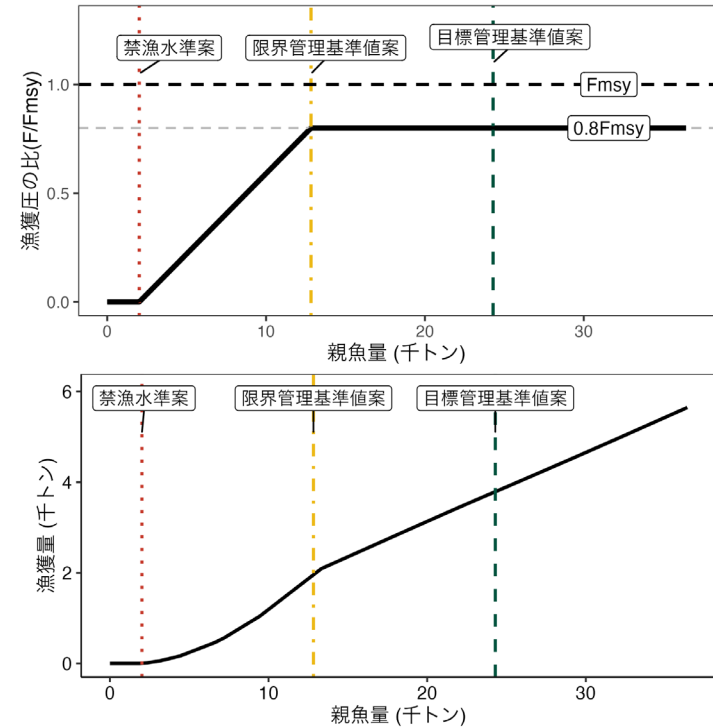
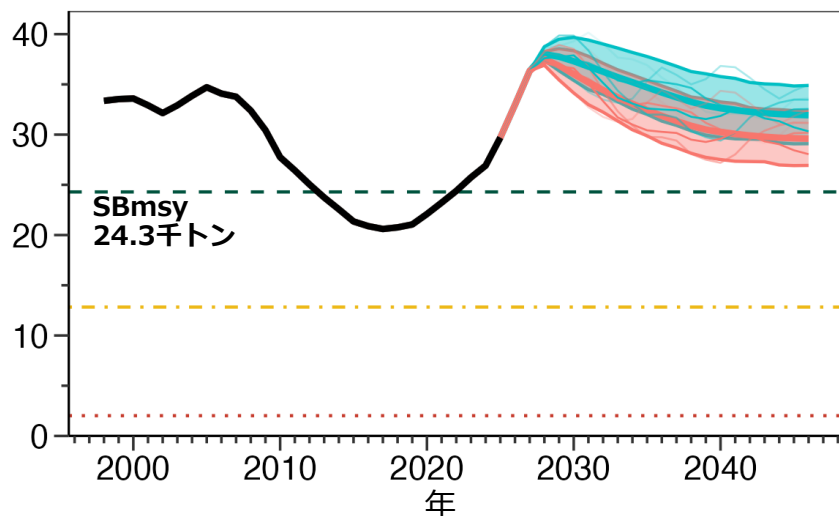


図10 漁獲管理規則案（上図：縦軸は漁獲圧、下図：縦軸は漁獲量）

Fmsyに乗じる調整係数である β を標準値である0.8とした場合の漁獲管理規則案を黒い太線で示す。下図の漁獲量については、平均的な年齢組成の場合の漁獲量を示した。

キンメダイ（太平洋）⑥

将来の親魚量（千トン）



将来の漁獲量（千トン）

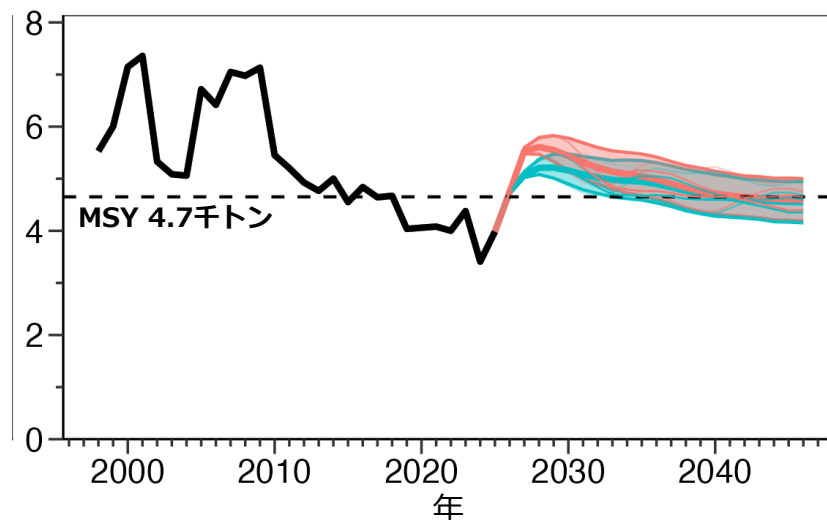


図11 漁獲管理規則案の下での親魚量と漁獲量の将来予測（現状の漁獲圧は参考）

β を0.8とした場合の漁獲管理規則案に基づく将来予測結果を示す。

平均値としては、親魚量はゆるやかな減少ののち横ばいとなるが、常に目標管理基準値案を上回る水準で推移し、漁獲量は一時的にMSY水準を上回るが、徐々にMSY水準に近づいていく。

- 漁獲管理規則案に基づく将来予測（ $\beta=0.8$ の場合）
- 現状の漁獲圧に基づく将来予測

実線は予測結果の平均値を、網掛けは予測結果（1千回のシミュレーションを試行）の90%が含まれる範囲を示す。

- MSY
- 目標管理基準値案
- 限界管理基準値案
- 禁漁水準案

キンメダイ（太平洋）⑦

表1. 将来の平均親魚量（千トン）

2037年に親魚量が目標管理基準値案（24.3千トン）を上回る確率

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	
1.0	33.0	36.3	36.2	34.4	32.7	31.1	29.9	28.8	27.9	27.1	26.4	25.9	86%
0.9			36.9	35.6	34.3	33.1	32.1	31.1	30.3	29.6	29.0	28.4	100%
0.8			37.5	36.8	36.0	35.2	34.4	33.7	33.1	32.4	31.9	31.4	100%
0.7			38.2	38.1	37.8	37.4	37.0	36.6	36.1	35.7	35.2	34.8	100%
現状の漁獲圧			38.0	37.8	37.3	36.8	36.3	35.7	35.2	34.7	34.2	33.7	100%

表2. 将来の平均漁獲量（千トン）

β	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037
1.0	4.7	6.8	6.7	6.4	6.1	5.8	5.6	5.4	5.3	5.2	5.1	5.0
0.9		6.2	6.1	6.0	5.8	5.6	5.4	5.3	5.2	5.1	5.1	5.0
0.8		5.5	5.6	5.6	5.4	5.3	5.2	5.1	5.1	5.0	5.0	4.9
0.7		4.9	5.0	5.1	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8
現状の漁獲圧		5.1	5.2	5.2	5.2	5.1	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.8

漁獲管理規則案に基づく将来予測において、 β を0.7～1.0の範囲で変更した場合と現状の漁獲圧（2023～2025年の平均： $\beta=0.73$ 相当）の場合の平均親魚量と平均漁獲量の推移を示す。2026年の漁獲量は予測される資源量と現状の漁獲圧により仮定し、2027年から漁獲管理規則案に基づく漁獲を開始する。

$\beta=0.8$ （標準値）とした場合、2027年の平均漁獲量は5.5千トン、2037年に親魚量が目標管理基準値案を上回る確率は100%と予測される。

注：表の値は今後の資源評価により更新される。